

佐渡島 自然・人・文化の成り立ち

～ 3つの遺産がつながり、土地・自然・人・経済・文化が形成された島～

3つの遺産
の連携

農業遺産の世界

文化遺産の世界

16世紀末

ジオパークの世界

3億年前

里山の成り立ちと、自然と経済が共存する島づくり

- 金銀山の開発に伴い増加した人口（→ゴールドラッシュ）の食糧需要を賄うためや、金銀山衰退期には産業の育成のために新田開発が促され、海沿いや海岸段丘の上から山間深くまで耕す、佐渡独特の棚田の風景を作り上げた
- 金銀の積出港からは物資だけでなく、他地域の文化・芸能がもたらされ、独自に発展した佐渡の伝統文化（能・鬼太鼓・文弥人形など）が今でも島に残っている
- 佐渡の美しい里山に、トキは日本で最後まで生息していた
- 美しい里山と、そこに棲む多様な動植物が共生する里山環境を持続させるべく、時代と環境変化に対応し生物多様性に配慮した農業システムが営まれている

⇒【テーマ】「トキと共生する佐渡の里山」

佐渡金銀山の繁栄と島の経済

- ※「佐渡金銀山」とは、江戸時代の初めに開発された相川金銀山を含む3つの鉱山の総称
- 相川金銀山は16世紀末から1989（平成元）年の操業休止まで、国内最大の金銀山として金銀を産出してきた
 - 鉱山経営を重視した徳川幕府は奉行を派遣し佐渡を統治した
 - 相川金銀山では、最先端の測量・排水・採鉱・製錬の技術が導入され金銀が生産された。さらには明治以降も欧米からもたらされた鉱山技術により金銀生産量は大幅に増加し、わが国を代表する近代的な鉱山となった
 - 金銀山への労働力や燃料としての炭の供給、鉱山町相川に住む人々への食糧供給のための田畑の開墾など、島の経済活動が金銀山の経営に結びついた金山の発展によりゴールドラッシュとなり、寒村に過ぎなかった相川は17世紀前半には人口5万人に膨れ上がった
 - 江戸時代以降の相川は島の経済の中心であり文化の原点でもあった
 - 佐渡で産出された金銀は、徳川幕府及び明治政府の財政を支えた

⇒【テーマ】「金を中心とする佐渡鉱山の遺産群」

地球の活動により形成された離島である佐渡島には、独特の自然・景観・文化・産業が生まれた

- 本土との隔離、変化に富んだ地形と明瞭な季節の変化が、佐渡特有の生態系を育み固有種や多様な植物相が形成された
- 3百万年前～ 佐渡島誕生の時代
 - ① 深化し続けた日本海が一転して隆起に転じ、たび重なる地震によって海底が陸地となった（佐渡島の誕生）
 - ② 佐渡島はさらに隆起を続け、大佐渡・小佐渡の2つの山地が形成される
 - ③ 山地の間の海は、山が浸食され河川から流れ出た土砂によって埋め立てられ、陸地へと変化し国中平野が形成された
→佐渡島の隆起がわかる地形（段丘）、地層、化石や岩石が島内で発見された
- 3千万年前～ 火山活動を伴う大陸縁の時代・日本海の誕生・海底の時代
 - ① ユーラシア大陸の東端に大きな亀裂（大断層）が入り、亀裂は徐々に広がっていった
 - ② 亀裂の中の低地では激しい火山活動が起り、地下ではマグマの熱によって温められた熱水が大規模な金銀鉱床を造り出した
 - ③ 亀裂は広がり続け、海水が入り込み日本海が誕生する。その後日本海の拡大深化は続き、大陸から切り離された大地（後の佐渡島・日本列島の一部）は水没する
→大陸時代の火山の石や化石、日本海誕生とその後の海底時代を示す地層、化石、岩石が見られる
- 3億万年前 太古の深海の時代
佐渡（日本）の原形がまだ深海の海底にあった時代
→この頃のものと思われる地層や化石が島内で発見された

⇒【テーマ】「トキが舞う金銀の島 3億年の旅とひとの暮らし」



野生復帰したトキ



棚田の風景



道遊の割戸（金銀採掘跡）



金銀鉱石



日本海誕生を示す化石（ビカリア）



隆起波食台（沢崎）